

人間味ある建築
ー感じ続けることについてー

22119013 明松 夏穂
指導教員 宮 晶子 教授

彷徨い 人間味 設計プロセス
追求 転回 仮固定

1. 研究の目的と背景

答えがない中で考える際の彷徨っている感覚、模索する感覚が心地よいと感じる。

現代の生活では、時間や仕事に追われ、早め早めに決断しなければいけないことが多い。また、都市の建物も合理性や効率性が重視されたリジットなものとして存在し、堅苦しく息が詰まるように感じる。人間は完璧ではないにも関わらず、完璧さや完璧な答えを求められるかのような。そのような都市の中で完璧な答えを求めのではなく、余地のある建築を創造する。これにより、使う人が建築の曖昧さを感じ取り、自身の不完全さを許容し考え続けられる状態であられ、居心地よく感じられるのではないか。本研究では、人間味のように曖昧さがあり、読み込み、感じ続けられるような建築を提案する。

2. 思考について

人間のような曖昧さを含む建築を創造するために、設計の思考プロセスについて考える。哲学者・千葉雅也は『勉強の哲学 来たるべきバカのために』において、思考は、アイロニー型とユーモア型に分かれるという仮説のもと、思考の深め方について述べている。

2-1. アイロニー

思考はアイロニーから始まる。

アイロニーはツッコミであり、周りが当然のように言っていることに対し、否定を向けること。そもそもの根拠を疑い掘り下げて話を深めていく、追求型の思考である。アイロニーを繰り返していくと究極の根拠、真理を追い求めるようになり、際限なく深まっていく。しかし、絶対的な根拠、真理は存在せず辿り着けない状態に陥る。

2-2. ユーモア

アイロニーが際限なく深まっていった際に自覚的にユーモアへの転回を行う。

ユーモアはボケであり、見方を変え、ズラしていく連想型の思考である。ユーモアが繰り返されると、元々のことと違うことが連想され、また違う話になりというふうに話が転々としていき、際限なく拡張していく。

2-3. 仮固定

ユーモアで際限なく広がる場所で、それを止めるために中断、仮固定をする。仮固定は享乐的なこだわりによりなされる。享乐的なこだわりとは、根本的な理由がない、身体にたまたま生じた、何か他者との偶然的な出会いによって生じたこだわりのことである。享乐的なこだわりを人はそれぞれ持っている。ユーモアを止めるのはあくまで仮固定であり、決断ではない。

決断は、アイロニーを徹底した時に起こる。アイロニーを深めると、真に完璧な答えを選択しようと、絶対的な根拠を追い求めるも、絶対的な根拠が存在せず、絶対的な無根拠に直面してしまう。だから無根拠が絶対なのだ。となり、決断ではたまたま偶然出会ったもので、何に決めても良いとなってしまう。決断の前に考えていたかは関係なく決断が起これば考えていたことが全てふいになる。逆説的に、何かを無根拠で決断することだけが絶対的に根拠づけられた決断なのであり、この決断によって何か「真理化」される。表面上、根拠があるように見えても本質的にはそうではない。これが起こるのは、ベストな選択をしようとする無理するからである。よって、決断ではなく、思考の経過を元にある程度のところで

中断、仮固定をする。
仮固定した状態でまた思考を続け、アイロニカルに分析し、ユーモアへ転回し、また仮固定する。と繰り返していくのが思考を深める方法であり終わりが無い。

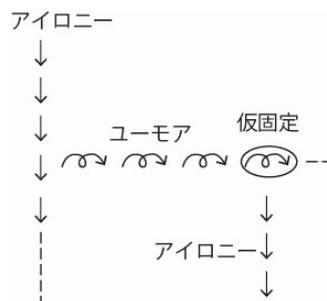


図1 アイロニー・ユーモア
・仮固定 概念図

このような思考の過程を

元に設計をし、享乐的こだわりによる仮固定の建築を作ること、完成した建築が、設計者の人間らしさが出て、使う人はこの建築はなんだろう。どういったものなのだろう。と感じ続ける建築になるのではない。

以下、アイロニーを追求、ユーモアを転回と言い換える。

3. 設計における追求と転回の分析

設計における追求、転回、仮固定を考える。

仮固定のような状態の建築を分析する中で自身の「地区センター」の作品に着目した。この作品は、言葉では表現しにくい、むず痒さを感じつつもなぜか良いとも思える、愛着を持つような建築である。



図2 地区センター作品

設計のプロセスを分析すると、既存の地区センターの一つの箱の建物を疑い、矩形をバラバラに配置することを自身の原理とし追求した。その後、2階に曲線的な大床をかけるという転回した設計をした。そこから次に居場所を作るよう考え、矩形の配置や床の高低差を追求した。またその後には屋根を大きくえぐらせたり、穴を開けたりという転回させ、最終的に形を作り、こうではないか。と仮固定するプロセスで成り立った。

これから分かるように追求と転回という思考のプロセスを経て自身の享乐的なこだわりによって仮固定する形態を決めている。現在、多く見られる建築は、設計者が自身を追求したものではないか。設計者が自身を追求し、さまざまな理由をつけて完璧なものとして建てている。しかし、転回をすることで、追求部分と転回部分がぶつかり、完璧な答えではないが、言葉では表現できない良さを持つ建築になる。

4. 対象敷地、用途

オフィスビルが多く存在する東京都中央区京橋1丁目に、都市で時間や仕事に追われ働く人々が日常の中でふと立ち寄る場所として書店を提案する。書店は何か良い本があるか探すという、ある程度の目的があることから不安感を覚えない心地よい彷徨いができる。



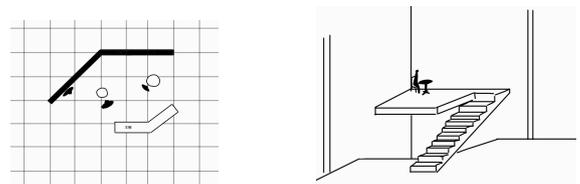
図3 敷地配置図

5. 設計プロセス

5-1. 設計における追求

追求は、一般的なものを疑う。また、自分の考え、原理を掘り下げる。

一般的に書店は均質的に本棚が並び、溜まるような居場所がない。カフェがある書店でも居場所は決められており、本を探し歩く中でふと佇むような居場所がない。このことから最初に書店に居場所を作ること追求する。135°に折り曲げた壁や高低差を用いて公共の場において開きすぎず閉じすぎない佇む場を作る。導線と居場所が緩やかに恣意的でない状態を作ることによって人が主体的に動き佇むことが起きる。壁は1000×1000の直交グリッド上に端点と折り曲げ部分を乗せ配置する。



135°の壁で作る居場所

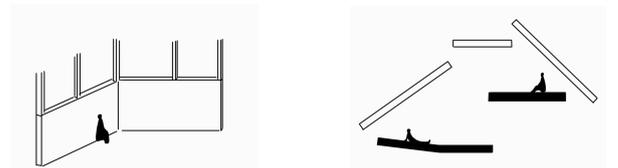
高低差で作る居場所

図4 追求のイメージ

5-2. 設計における転回

転回は、追求したのから自覚的に二重人格のようになり、見方を変えて考え、設計をする。

内部の壁を柱にし、視線が通るようにする。また、屋根を大きく傾けたり、床に勾配をつけたりと、壁や高低差でできた空間とはまた違う空間を作り出す。



壁を柱にする

急勾配の屋根、勾配のある床

図5 転回のイメージ

5-3. 設計における仮固定

仮固定は、転回する中で自身が、これが良いのではないかと思うものを模型や図面で全体像を作り上げる。

以上の追求、転回、仮固定を繰り返し設計する。繰り返すことで、自分の考えを疑いながら設計することができ、人間の中に潜む矛盾する感覚、人間味が表れるのではないかと考えた。

このようなプロセスを経てできる、完璧な答えでない建築を、都市の時間の中で過ごす人が読み込み、感じ続けることを期待する。

6. 主要参考文献

- (1) 千葉雅也. 『勉強の哲学—来るべきバカのために』 文藝春秋, 2017年